

交流山行 丁子山・湧谷山

2012年3月10日(土)～11日(日)

1泊組：L坂野、片岡k、片岡s、料理人、世田、山田t

日帰り組：L磯部s、磯部n、やまたくお、太箸

内容未定のまま実施日が迫っていた交流山行。直前になって「奥美濃で雪洞体験」という企画に落ち着いた。震災直後ゆえ自粛した、昨年の計画のリベンジである。

6人という、交流山行としては寂しい人数を車2台に分乗し、木之本IC経由で坂内村に向かう。登山口は村営スキー場。心配していた除雪もしっかりしてあり、ノーマルタイヤでも余裕でアプローチできた。

入山はスキー場の斜面から。休業中ということなので遠慮なくゲレンデに踏み込む。グシャ、という厭な感触。昨日までの降雨に続き、今日のぼやけた晴天のおかげで雪は腐りきっている。この時、頭の中を様々な計算が飛び交った。そもそもこの山行、「9時に登り始めて12時に湧谷山山頂、残った時間で雪洞掘り」という計画だった。今の時刻は10時近いし、「登り3時間」は雪が締まっている前提の話だ。1歩目にして敗北確定。もう柔軟に対応していくしかない。輪カンを付けて歩き出す。

村営だけあってスキー場の斜面は短い。それでも年齢層の幅広い今回のパーティでは、歩く速さに差が出る(最高齢の料理人さんがやたら元気だったりもするが)。中でもキツそうにしていたのが山田tさん。雪山経験が無い上に、馴染んでいない装備類が重荷になっているようだ。特にフィッティングの上手くないザックが辛い。そしてそれをフォローしているのが片岡k君。ロープも垂らさず腕組みして見下ろす、沢での彼とは別人のよう。交流山行はいろんな一面が見られて面白い。



スキー場の末端から樹林帯に入る。ちょうど境目では雪解け水が流れてゲレンデの下に潜り込んでいく。春を感じさせる景観だ。樹林はそれほど密ではない。どのよう

にでもラインをとれるが、夏道と思しきトレースがあるのでこれを辿る。相変わらず足が雪に潜る。なるべくしっかりステップを刻むように意識し、ゆっくり目に登ることにした。しばらくは斜面をトラバースしながら登っていき、やがて稜線に乗って丁子山のピークに至る。途中3度ほどの小休止を挟み、ここまでの行程に4時間を要した。目の前に湧谷山のピークも見えるが、さらに小一時間ほどかかるだろう。

単なるピークハントでは面白くない。この日は湧谷山まで行かず、その時間を雪洞掘りに費やすことにする。ゾンデを刺しながら周囲を徘徊したところ、どこも2m強の積雪量だった。丁子山ピークの南東側、少し切れ落ちている斜面を見定め、土木工事を開始する。



まずは大雑把に雪面を掘り下げ、作業スペースを確保。そこから水平に入り口を掘っていく。始めは入り口を小さめに作っていたのだが、作業効率が悪過ぎて後から広げる結果になった。交代制で雪を掻き出していく。経験のない作業なだけにみんな乗り気なのだが、スペースの都合上、掘る作業を担当するのが2人だけなのが辛いところだ。染み込んだ雨の影響だろうか、地面に近い層の雪が想像以上に堅い。掘り易い方向に広げていくとT字型の雪洞になってしまう。それでも4時間の奮戦の甲斐あり、何とか6人押し込めるサイズに仕上げることができた。時刻は6時。時間的にもギリギリといったところだ。

いざ雪洞に入ってみると様々な問題点が浮上した。まずは床。平らに均したつもりでも、断熱のために敷いた銀マットが滑ってしまう。ま、これは仕方ないことかもしれない。天井の仕上げの悪さは深刻で、ところどころから水滴が垂れて水たまりを作った。おかげで私の靴下はぐっしょり。一晩中寒い思いをする羽目に。そして最も問題なのは、一列に並ぶほか収まりようのない、T字型の構造そのものだろう。交流山行なのに会話が弾まない。交流できない。大失敗である。それでも私たちは限られ

た時間で精いっぱいやったのだ。

夕食は料理人さんによるテグタンスープ。韓国料理とのことだが、酔っていた料理人さんの手元には未使用の調味料が残っていた。これはこれで美味しかったけど本当はどんな料理だったのか気になる。そして訪れるギュウギュウ詰めの就寝タイム。これは片岡 k 君が入り口（ブルーシートが掛けてあるだけの半外）で寝ることで解決。隙間風と粉雪が寒かった、とのこと。今回の彼は献身的だ。



翌朝。7時に起床し、食事、身支度をのんびりと済ませる。湧谷山ピストンは日帰り組と合流してから、と決めていた。事前に打ち合わせていた9時の無線連絡の後、日帰り組はすぐに姿を見せた。アイゼンを装着した彼らは、2時間弱で丁子山に着いたらしい。雪質でここまで違うものか。何だか悔しい。日帰り組に雪洞を披露。無駄に1日過ごしたわけではないとアピールし、多少なりとも溜飲を下げる。

総勢10人、交流山行と呼ぶにふさわしい規模になり、湧谷山へと出発する。天気は快晴。雪質は安定しており、輪カンもアイゼンも必要ない。わずかに低い鞍部を抜けて湧谷山の斜面を登る。30分ほどの短い行程だったが、晴れた日の雪山歩きは楽しいものだ。山頂は視界が開けており、周囲の山々が良く見える。特に蕎麦粒山の山容が印象的で、登山意欲を掻きたてるものだった。





山頂で小休止。集合写真を撮った後、往路を引き返し始める。踏んだ感触から、急速に雪が緩んでいっているのが分かった。先頭に立った磯部 s さんが斜面を尻セードで降りだし、経験のない人たちにやり方を伝授し始める。集合写真の音頭からこちら、山行は磯部 s さんの独壇場だ。山での彼は平地の 5 割増して燃えている。

丁子山の山頂に戻る頃には雪質は大分柔らかくなっていた。朝方には頑丈だった雪洞も、今であれば何とか崩せそうに思える。中からスノーソーで切れ目を入れ、屋根に飛び乗る。ズボッという音とともに体が半分埋まった。それを見ていた磯部 s さん、率先して作業に参加。結果、大変スピーディに雪洞を崩すことができた。これで他の登山者の迷惑にはならないだろう。

丁子山からスキー場へ。すでに昨日と同じグズグズの雪質だが、降りであればそれほど苦にならない。登りで 3 度の休憩を挟んだ斜面を、私は一息に下山した。ただし、不慣れな人には登り以上に苦手なものなのかもしれない。足を取られる人、それを助け起こす人などの姿も見られた。よし、交流だ。

全体としては計画通りにはいかなかったし、雪洞の完成度などにも不満が残る。しかし、雪洞作りを通して交流を深めるという、おおよその目的は達成できたものと思う。雪洞山行は毎年恒例にしても良いかもしれない。

<タイム>

1 日目：坂内スキー場(09:45) - 丁子山(14:00)

2 日目：丁子山(09:40) - 湧谷山(10:10-10:20) - 丁子山(10:50-11:20) -
坂内スキー場(13:00)

(坂野 記)